

ヨハネ福音書7章ではイエスはガリラヤからエルサレムに赴くことが記されています。本日の聖書テキストでは、イエスについてどういう人物であるかということが繰り返されています。誤った情報や、不足している情報で、誤った判断をする人間の姿が描かれています。また偏見によって殺意まで抱いています。早まった判断をすると、人を裁き、非難し、命まで奪ってしまうことが起こるのです。

イエスはガリラヤ地方をめぐって宣教活動をしていたのですが、イエスを殺そうとユダヤ人たちが狙っていたので、これ以上ガリラヤでの活動を続けることを止めようと考えておられたようです。ちょうどその時、仮庵祭（かりいおさい）が近づいていました。ガリラヤでの宣教活動はイエスの幼少期を知っている人たちがいて、あまりうまくいかなかったようです。そこで、イエスの兄弟たちがイエスに助言します。ガリラヤで多くの業を成したのですが、その働きをユダヤ人たちは評価しなかったため、イエスの兄弟たちは仮庵祭の時期で多くのユダヤ人がエルサレムに行くのだから、イエスもエルサレムに行って、ご自分の業を多くの人たちに見せることで、公に知れわたるようにならうかと勧めたのでした。けれども、イエスの兄弟たちはイエスの奇跡的な業を見ても、その真意を理解していませんでした。5節に『兄弟たちも、イエスを信じていなかったたのである』とあるように、イエスの宣教活動は、イエスが個人的に能力を発揮していることだと理解しているだけで、そこに神の支配の現実を見出しはなかったのです。

イエスの兄弟たちの助言はこの世的にイエスの名声がとどろき、イエスを信じる人々がたくさん輩出されることだったようです。イエスの兄弟たちがエルサレムに行くように勧めたのは、4節にあるように、公に知られるように奇跡的な業を見せているのならば、ひそかに行動しようとする人はいないのだから、奇跡的な業をはっきりとこの世に知らしめた方が良いのではないか、という観点からエルサレム行きを勧めたものだったのです。

つまり、イエスが当時のユダヤ教会の中で認められるようになりなさいという勧めだったのです。この世的にイエスの活動が認められることを第一に考えてエルサレムに行ってみたらよいのではないかと考えたのです。けれども、それに対して、イエスは6節以下にあるように、『わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備え¹られている。世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証しているからだ。あなたがたは祭りに上って行くがよい。わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである』と言って、イエスはガリラヤにとどまられたのです。

イエスはここで「わたしの時」という言葉を繰り返されています。「わたしの時」というのは、イエスがエルサレムに入場してから十字架にかけられて殺されることです。「イエスの兄弟たちの時はいつも備えられている」という表現は、当時のユダヤ教会の価値観の中に兄弟たちはいるのだから、世がイエスの兄弟たちを憎むようなことは起こらない。逆に、ユダヤ教会がイエスを憎んでいるのは、ユダヤ教会でまかり通っている考え方が誤っていることをイエスが指摘しているから、ユダヤ教会はイエスを憎んでいるからだと答えているのです。

イエスにとって、当時のユダヤ教会はローマ帝国に支配されていて、ユダヤ人にとっては神の支配が全く貫徹されていない状況のように受け止められていたのです。けれども、イエスの奇跡的な業は、そのような桎梏の暗闇の世の中に確かに神の意志としての救いの光が見えてきているという希望を示すものだったのです。

けれども、イエスの兄弟たちがイエスに求めたものは、この世的に評価されることでした。この世的な評価の基準は、いくら稼ぐ仕事についているかであったり、競争にどれだけ勝っているかであったりするわけです。また、この世的な手法で伝道をするのならば、有名人に教会に来てもらって、こんな人も来ているのですよ、と宣伝する方法であったりするわけです。けれども、このような手法を取らないというのがイエスの考え方なのです。

さて、日本人にとって8月は原爆の記憶を想起するときです。8月6日と9日は人類史上初めて原爆が人間の上に落とされた日です。いまだに「原爆投下によって戦争を終わらせることができた」とか「原爆投下はしょうがない」などの発言が繰り返されています。アメリカ本土でも「原爆投下は正しかった」と受け止めている人が多いのが現実です。けれども、日本人がこの原爆を受け止める際に、広島の原爆死没者慰霊碑の「安らかに眠って下さい 過ちは繰返させぬから」という刻印に違和感を持つ人は多いと思います。過ちを犯したのは、無垢の非戦闘員の上に原爆を落とした米国の

ずなのに、被爆した広島慰霊碑にあたかも自分たち日本が過ちを犯したかのように書くのは、戦後の占領軍の日本支配の影響の残滓だと思われれます。

少し原爆投下までの歴史の変遷を見ていきたいと思います。終戦前の1944年9月に米国のルーズベルト大統領と英国のチャーチル首相の会談で、アメリカが開発中の原爆を日本に落とすことが決定されました。また敗戦が決定していないドイツはなぜか投下の対象から外されたのです。翌年の1945年5月には、ルーズベルト大統領の指示で、秘密の原爆投下訓練を行っていた部隊をユタ州からサイパン島のそばのテニアン島に移動させました。そして、1945年7月17日に米国、英国、ソ連の3国によるポツダム会談が行われたのですが、その前日の7月16日にニューメキシコで原爆実験が成功しているわけです。けれども、既にルーズベルト大統領は脳卒中で4月12日に死亡していたので、副大統領だったトルーマンが大統領に昇格していたのです。トルーマン大統領は、ニューメキシコでの原爆実験の成功から9日後の7月25日には、8月3日以降に広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに原爆を投下せよとの命令を下しました。一方、米国、英国、中国（後にソ連が加わる）によるポツダム宣言が発表されたのが7月26日です。日本の鈴木貫太郎首相がそれを「無視する」と発表したのが2日後の7月28日です。

つまり、時系列で見ると、ポツダム宣言の発表前に原爆投下の命令は下されていたのです。またトルーマン大統領は、日本が中立条約を結んでいるソ連を通して終戦へ向けた和平工作をしていることをスターリンから聞いて知っていました。また、「国体の維持」つまり天皇の地位さえ守ることを約束すれば、疲弊しきった日本は降伏することを元駐日大使であったグルー國務次官から5月の段階でトルーマン大統領は聞いていました。ですから、ポツダム宣言を否定した日本は徹底抗戦をするだろうし、原爆を投下しなければ終戦までの戦いで米側にも多大な犠牲が出るだろうという原爆投下の理由も嘘なのです。

しかも、トルーマン大統領は、ルーズベルト前大統領が2月のヤルタ会談で、ドイツ降伏後3カ月以内にソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄して対日参戦することで、満州の日本の権益を手にすること、さらに南樺太と千島列島を自国領土とするという秘密協定を知ってびっくりします。トルーマン大統領から見ると、もしその通りになったら、第二次大戦後の極東情勢が共産主義に支配されてしまうとの危機感を抱いたわけです。そこで、トルーマン大統領はソ連の参戦前に日本を降伏させなければならぬと考えました。実際に、5月8日に降伏したドイツのヨーロップでは、ソ連が東、ヨーロッパで共産党政権を次々に誕生させていました。そのため、できるだけ早くに原爆を投下させたいと考えたのです。ですから、戦後の米ソの覇権争いを見据えて原爆の恐るべき威力を示してソ連を威嚇しておくことが重要だと考えたのです。アインシュタインをはじめとする科学者たちは、何も日本の民衆の上に落とさなくても威力を示すことができます。日本への原爆投下に反対しました。アイゼンハワー將軍さえもが7月20日にトルーマン大統領や陸軍長官に「日本は既に敗北しているので、原爆投下は不必要」と進言していました。ですから、日本がポツダム宣言をあつさり受諾してしまうと投下のチャンスがなくなってしまうのです。そこで、日本がすぐに受諾しないように、ポツダム宣言の草案にあった「国体維持」の言葉をわざわざ削除して投下準備の時間稼ぎをしたのでした。ですから鈴木貫太郎首相はポツダム宣言を無視することにしたのです。この作戦は見事に成功し、8月6日と9日に原爆を落とすことができました。ソ連は8月8日に参戦し、14日に日本はポツダム宣言を受諾しました。その後スターリンは樺太を占拠し、さらには北海道の北半分への進攻まで要求しましたが、トルーマン大統領はそれを拒絶し、朝鮮半島の38度線以南への進攻も阻止したのです。いわゆる核の威力が効いたのです。

このように見てくると、原爆投下はトルーマン大統領にとってはソ連による共産主義化を阻止するためのものであり、戦後の米ソの派遣争いを念頭に置いたものだったのです。このような歴史的経緯を知らずに、今なお、原爆投下によって日本は降伏したという言説がまかり通っているのです。このような歴史的経緯はなぜか日本の教科書には掲載されていません。文科省による検定がそうさせているのでしょけれども、いままお、被爆2世、3世の方々のご苦労を見るにつけ、誤った情報によって真実が見えなくされている事実には暗たんたる思いを抱きます。本日聖書箇所はイエスについてどういう人物であるかという言説が繰り返され、誤った情報や、不足している情報で、誤った判断をする人間の姿が描かれています。また偏見によって殺意まで抱いています。原爆投下がトルーマン大統領の共産主義に対抗するために、敗戦が決定的だった日本に投下された歴史的な事実を戦後80年を迎える中でも、改めて顧みることが、無残に人を殺しても平気な人間の出現を阻止することができるのです。神の教えは、そのような人間の出現を認めていないことを改めて確認したいと思います。